

# 柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌

住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1

柿生中学校内

電話:070-1503-6401/044-988-0004

<http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo>

第 174 号

白井義胤翁  
を訪ねて 1

## 義胤翁と白井家

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

連載にあたって

柿生中学校の 70 周年に際し、機関誌『柿生文化』に「草創期の柿生中学校」と題する拙文を 17 回にわたって連載いたしました。拙文の最後に「そして思い出の丘」と題して、柿生の教育の大恩人、白井義胤、白井碓二郎、青戸四郎衛門の 3 氏の功績を記しました。調べの不十分な拙い一文でしたが、縁とは不思議なもので、この記事が白井家の発祥の地、千葉県佐倉市白井で活動するボランティア団体「白井八景ハヶ寺巡り実行委員会」代表の森秀夫氏の目に留まり、氏のご厚意で、義胤翁の曾孫に当たる小林一夫氏(小林氏の母堂和子様が、義胤翁の次男公胤氏の次女です)の知遇を得ることができました。

白井義胤翁は、旧柿生村に当時の神奈川県が定めた基準に適合する高等小学校を建築する費用一切に、学校の必要とする備品や什器の購入費まで賄うに十分な額を寄付してくださいました。その額は当時の額で 3 千円と、村の税収を上回る額だったと記されています。まさに柿生の教育の大恩人なのですが、翻って義胤氏のような人物を育てた白井家や、氏の生涯については、今日までほとんど言及されていません。調べられる範囲は限られても、多少なりとも義胤翁の人物について紹介できないかと考えていたことでもありましたので、小林一夫氏にご提供いただいた資料や情報、それに森氏らの活動の成果などを元に、私が理解できた範囲で、白井家と義胤翁について数回にわたって、記させていただきます。

### 義胤翁と白井家

義胤氏(幼名は不明)は、当時の下麻生村で、ペリー艦隊出現の 9 年前、天保 14(1844)年に、白井(のちに碓井と改姓)庄右エ門・コト夫妻の長男として生まれました。姉シマと 2 人姉弟でした。庄右エ門家にとって、彼はたった一人の跡取り息子でした。庄右エ門夫妻は、その大事な跡取り息子を、本家筋にあたる白井家に養子に出し、姉のシマに養子銀治を迎えて、跡を継がせています。やがて義胤氏は、白井本家の中興の祖と言われるのですから、幕末の白井本家が豊かな豪農であったとは考えにくく、もちろん村の名主というわけでもなく、本百姓(=自営農民)の上層、あるいは村の小商店といった暮らし向きだったのでしょう。一方一人息子を本家の養子に出した碓井庄右エ門家は、養子に入った銀治氏から 4 代目の碓井純氏が、当主として先祖伝来の地を守っておられ、こちらも平均的な自作農民の暮らしを続けてきたのだろうと推察されます。

ではなぜ、後の義胤氏は養子に出されたのか。それを考えるために、白井氏、白井家とはどのような家柄なのか。白井家のルーツを辿ってみましょう。白井家は、NHK の人気ドラマ「鎌倉殿の 13 人」にも関係する、平安時代末期の下総地域の豪族でした。ドラマの初期に上総広常(本名平広常)が活躍しましたが、彼に並ぶ下総の豪族(のち有力御家人)が千葉常胤でした。当時広大な土地を支配する有力豪族は、後継ぎ以外の男子には、所領の一部を分け与えて独立させ、所領の守りを固めるのが常でした。北条時政が長



義胤翁が建立した生家の墓  
ここでは白井が使われている

男ながら母の出自が卑しい義時に、江間の領地を与えて江間義時を名乗らせたのと同じです。常胤の祖父常兼は、長男常重以外の子どもたちを皆独立させて、周辺の守りを固めたのですが、その一人三男の常安が、白井の地を分け与えられて白井三郎常安を名乗ったのが白井家の起こりです。千葉常胤は 300 の手勢を率いて頼朝軍に加わります。この中には当然、白井氏の手勢も含まれていたでしょう。戦い済んで白井氏は、白井の高台に白井城(城といっても武將の居館です)を構え、城主に取まったのです。その後、紆余曲折があるのですが、最終的に白井家は戦国末期に北条氏の滅亡と運命を共にして滅び、白井一族は各地に離散します。この時白井本家と本家に従った主だった家臣が、下麻生の地に居を定めます。下麻生の白井家、碓井家はこうしたルーツを持っているのです。大事な一人息子を本家の養子に差し出した庄右エ門家は、代々本家の求めに応じる定めを負った、本家に最も近い家臣(家の子・郎党)だったのだろうと私は考えています。現当主碓井純氏宅の庭の一郭に、手入れの行き届いた立派な墓石があります。義胤翁が生家のために建てた墓石です。翁は養子に入った本家だけでなく、生家も大切にしていたのです。

続 く

大地に刻まれた  
歴史探勝 11

# 古代の火葬文化を実証する骨蔵器群

村田 文夫(日本考古学協会会員)

冥界へ旅立ちする人は火葬されますが、年長組のわたしは土葬による習俗も見慣れてきました。しかし古代の市域からは、火葬骨を収納した容器が数多く発掘されています。

## 何故か川崎市域周辺からは、火葬骨蔵器が集中的に発見される

昭和40年(1965)に川崎市教育委員会で文化財業務の担当を拝命したとき、上司の古江亮仁係長から、川崎市域の丘陵地は東日本でも稀有なほど、奈良・平安期の火葬骨蔵器の集中域であると教えられました。それらの資料は、耕作中に発見されると古江さんが駆け付け、市の所有物として文化財保護法上の手続きをされました。発見者は、骨壺内の火葬骨を気味悪がって忌避しますが、古江さんは構わず全部持ち帰ってきました。この措置のお陰で、被葬者の性別・年齢・副葬品などは、極めて重要な資料として活かされています。

その後、わたしは同僚の増子章二さんと、市域の火葬墓・骨蔵器を整理・分析する機会を得て36遺跡56事例を確認しました。時期的には8世紀～9世紀後半に集中し、その分布の中心域は、意外にも矢上川の支流である有馬川流域にありました。これらの資料から多くの古代史像が復元できますが、文字数の制限もありますので、ここでは微視的な分析視点と、巨視的な分析視点から話題を拾っていきましょう。

＊

## 微視的な分析事例—麻生区坂東谷古代墓像

この古代墓からは、昭和32年に2基、昭和58年に4基の骨蔵器が発見されました(第1図)。後者の4基は9世紀後半期。7号墓は上・下2段の構築。下段の墓室からは土師器製の骨蔵器と墓誌と思われる鉄板が発掘され、被葬者は成年・男性でした。9～11号墓は近接し、9号墓は成年でしたが性別不明、10号墓は成年・女性、11号墓は小児・性別不明でした。性別・年齢差による墓(土坑)の規模は意外と少なく、9号墓の成人骨は、一辺長80cm前後の墓穴、11号墓の小児骨は一辺長60cm前後でした。10号墓の成年・女性骨には、骨を精緻に彫刻した秀逸な簪(かんざし)状の遺物が随伴していました。ちなみに慶雲2年(705)以降、女性は既婚・未婚を問わず頭上で結髪し、平安時代になり垂髪となりました。坂東谷の彼女は、前代まで流行していた結髪でした。7号墓と10号墓は10m前後も離れています。おそらく10号墓の女性は家長の妻ではなく、死後、生家の墓に帰葬され、11号墓の小児は彼女の子供でしょう。子供墓にしては、特大の墓穴ですね。

ちなみに当時、夫婦は地域を離れた別墓葬儀で、例えば源師房の四女・麗子は、藤原師実と結婚しましたが、麗子の遺骸は、藤原一門の墓である京都・木幡ではなく、源氏ゆかりの白河に葬られました。当時は実家の墓に帰葬すると、その家が栄えると考えられていたようです。

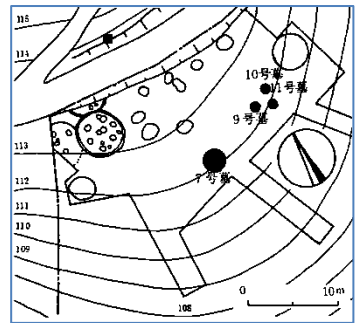
墓地の風情は静寂ですが、この話しには疑わぬ血筋のロマンが漂ってきますね。

＊

## 巨視的な分析事例—有馬川流域などの古代墓像

わが国における火葬は、文武天皇4年(700)、僧道昭に始まるとされています(『続日本紀』)。道昭は遣唐使ですから、火葬の風習の背景に大陸文化との関連性は濃密でした。好例を挙げれば昭和28年(1953)に有馬川流域の火葬墓から発見された事例(写真1)は、多数の土器容器を用いた埋葬手法が特徴的。これは韓国扶余中井里唐山遺跡の事例と瓜二つ(第2図)。彼我に文化交流の様態が浮かんできますね。また宮内庁書陵部の『稻毛本庄検注目録』によれば、稻毛本庄に「皮古」といって、動物の皮で籠の周囲を張り込んだ職人衆がおり、彼らは税制面での配慮がなされています。この種の皮なめしの技法は、朝鮮半島から彼らによってもたらされたと『日本書紀』には記されています。

有馬川流域から発掘された火葬骨蔵器の考古資料と、『検注目録』にみる皮古職人の文献記録は、彼我の文化交流を示唆する貴重な資料と位置付けられます。



第1図 昭和58年調査の坂東谷火葬墓(7・9・10・11号墓)

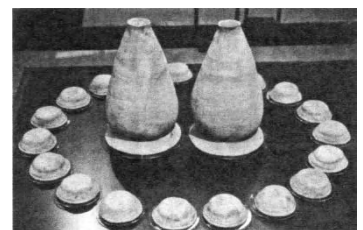
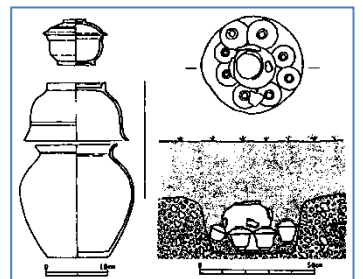


写真1 有馬後谷戸火葬墓(発見時の状況)



第2図 韓国扶余中井里唐山遺跡(写真1に類似)



シリーズ  
教育の歩み 第3部

# 日本の学校と教育(30)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

## 新たな教育システムの構築を

文部科学省が2000年代に入って実施した小学6年生と中学3年生の全国一斉テストがあります。この時は、都道府県別の平均点などが発表されたため、マスコミ報道では都道府県別の平均点順位にばかりに目が向いてしまい、大事なポイントが霞んでしまったのですが、記述式の回答を求める、思考力を問う問題に対する正答率が低いという現実が、指摘されていました。

こうした現実、教育界では90年代には、幅広く知られていました。ここに掲げるのは1997(平成9)年9月29日に当時の文部省が発表した「新学力テスト」(新学力課程達成度調査)の結果報告を受けた、翌30日の各紙朝刊記事です。各紙とも「記述式お手上げ」といった見出しを掲げ、以下のような論評を加えています。

「全体としては良好だが、思考力・判断力・表現力は伸び悩んでいる」(日本教育新聞)

「覚えるのは得意だが、考えたり、表現したりするのは不得手」(毎日新聞)

「日本の子どもたちの学力に潜む問題点が分かった」(日本経済新聞)

文部省自身も「選択肢から正答を選ぶ形式では得点が高いが、考えたり、表現したりする能力を見るために、文章で答えさせる問題では、正答率が低く無記述も目立った」と記しています。

出題例として、中学社会を見ると、室町時代に題材を求めて、「正長の土一揆について、農民側から見出しをつけると、『やったあ！農民が初めて立ち上がったぞ！』となるが、支配者の側から見出しをつけると、どうなるだろうか」と問うた問題の正答率は27%に留まりました。また「能の前売り券発売中！」という広告を参考に、「この時代の文化についての広告を作りなさい」という出題では、水墨画や狂言を織り込めば正解なのですが、正答率は辛うじて20%に達したに留まりました。選択肢型出題の正答率は、最も低い正答率でも40%は超えていますから、記述式を苦手とする傾向は、はっきりしています。国語や理科、算数・数学でも状況は同じでした。「数学的な考え方や科学的思考をチェックする出題への正答率は、その他の問題の正答率に比べて、大きく下回っている。」(朝日新聞) 暗記は得意だが考えるのは苦手という傾向は明白でした。

同じ時期1996年の親御さんへの調査結果を見ましょう。「小・中学校で、子どもの能力を伸ばせる教育が受けられることは、大切だと考えますか？」の問いに、肯定の回答は70%を超えています。高等学校教育についての調査でも、同じく70%以上の親御さんが、肯定的に答えています。問題はその後です。「小・中学校や高等学校の教育に満足されていますか」との問いに、十分満足ないしはどちらかといえば満足と答えた親御さんの割合は、小・中学校で17%、高等学校では15%に留まったのです。小・中・高の教育は、子や親のニーズを受け止め、子の持つ能力を十分に伸ばしてくれていないと考え、学校に対して失望感を抱いている親御さんが、8割を超えている事実が示されたのです。

26~27年前の調査結果を示したのは、当時小・中学生だった子どもたちの多くが、今は子を持つ親として、今日の学校に関わっていると想定されるからです。状況は改善しているのでしょうか。「いじめ」の多発は留まることを知らず、平成18年に10万件であった報告が、令和2年には50万件と14年間で5倍に膨らみ、しかも低学年化が進んでいる事実が報告されています。不登校生徒も増加の一途で、令和2年には小・中のみで19万6千人を超えました。学校を取り巻く環境はさらに悪くなっている現実が透けます。年齢で子どもを輪切りにし、学級という枠

に閉じ込め、自分たちに選択権のない担任教師や教科担当教師の授業を、興味の有無にかかわらず聞くことを強いる、無償の近代義務教育というシステムは、デジタル時代と化した現代では、もはや通用しなくなっているのではないのでしょうか。子どもたちの実情に合わせた新しいシステムを、1日も早く構築することが求められているのです。 3部 完



区民記者の葉

ナウマンゾウに思うこと

今月から「あさお区民記者」有志が、各人の文責で不定期にエッセイを寄稿させていただくことになりました。皆さまに楽しんでいただければ幸いです。

さて今回は、ナウマンゾウについてお話ししたいと思います。

ナウマンゾウは、肩高2.5-3m(オス)、1.9 m(メス)、体長4.5m(オス)、3 m(メス)ほど、オスには長さ約2.4mの牙、メスの牙は小型でした。日本には35万年以上前~1.7万年前の間生息し、藤沢市渡内天岳院下、中央区日本橋浜町、千葉県印西市、北海道中川郡忠類村(発掘時の旧名を含む)からは、ほぼ全身の骨格が発掘されています。「日本橋浜町」には驚かされます。

神奈川県はナウマンゾウ化石の多産地で、上記の藤沢市のほか川崎市高津区下作延、小田原市小竹など21例発見されています。本紙読者の方はご承知のとおり、早野上ノ原遺跡(麻生区)の最古の住人は3.3万年前の人々ですから、多分ナウマンゾウも食したことでしょう。

「ナウマンゾウ」の名称は、E・ナウマンが1882(明治15)年に学会誌に報告したことにちなみ、京大助教授だった榎山次郎氏が命名したことや、ナウマンが「フォッサマグナ」の発見者でもあったことは、余り知られていないかもしれません。

麻生区でナウマンゾウの化石が見つかり、柿生郷土資料館で展示されれば嬉しいですね。

(あさお区民記者 仲原照男)

\*参考資料:第3次早野上ノ原遺跡発掘調査概要書(吾妻考古学研究所2013年)、「ナウマンゾウがいた」(神奈川県立生命の星・地球博物館2007年7月)、小泉明裕「神奈川県内産ナウマンゾウ化石の新資料」(同上博物館・神奈川自然誌資料(14)1~6、1993年)、高橋啓一「日本のゾウ化石、その起源と移り変わり」(豊橋市自然史博物館研報No. 23, 65-73、2013)、その他、野尻湖ナウマンゾウ博物館Hpなどを参照した。

\*あさお区民記者:認定NPO法人あさお市民活動サポートセンターに所属し、麻生区を拠点に活動しているボランティア団体等を紹介しています。

柿生郷土史料館催物案内 【参加自由、入場無料】

◎開館日:11月6・13・20日(毎日曜日) 12月3・10・17日(毎土曜日)

◎開館時間:午前10時~午後3時(緊急事態宣言等発令の場合は休館となります。セミナーも再々延期です。)

第20回 特別企画展

ポスターで迎える昭和の映画

期間:10月8日(土)~1月22日(日)

場所:柿生郷土史料館特別展示室

戦後の日本映画黄金期の娯楽映画のポスター14枚を展示いたします。

映画の製作者は、東宝、松竹、東映、日活、大映の5社からなり、昭和29年旗本退屈男/謎の怪人屋敷(市川右太衛門)~昭和41年スチャラカ社員(長門勇)までと、まさに戦後の日本映画全盛期の姿を映しています。なつかしさも満載です。

右のポスター(大版)は昭和45年7月公開の「霧笛が俺を呼んでいる」。日活が大々的に売り出した赤木圭一郎のヒット作で、日活得意の無国籍なアクションドラマが展開します。親友の恋人の妹役で、当時新人だった吉永小百合も出演しています。



ボランティア募集のお知らせ

この度、運営ボランティアの方を追加募集いたします。

役割は主に、①機関紙「柿生文化」の編集、紙面レイアウト、記事投稿者・印刷業者との調整②ホームページの更新管理、「お問い合わせ」への窓口③セミナー等のイベントにおける必要機材(パソコン・プロジェクタ・マイクなど)の準備、ビデオ撮影・保管、など。初歩的なパソコン操作スキルが必要ですが、その他の知識は不要です。ご一緒に地域の歴史を楽しみませんか。

応募いただける方はホームページの「お問い合わせ」から連絡をお願いいたします。